

ナラティブ研究の基本的視点

—当事者の視点と分析者自身の記述—

企 画 :	森岡正芳	神戸大学大学院人間発達環境学研究科
	山本智子	近畿大学
司 会 :	川俣智路	大正大学
話題提供者 :	森岡正芳	神戸大学大学院人間発達環境学研究科
	山本智子	近畿大学
	松嶋秀明	滋賀県立大学人間文化学部
指定討論者 :	赤木和重	神戸大学大学院人間発達環境学研究科

[企画主旨]

ナラティブとは、人と人との対話で生じる「語り」を対象にした研究であり、分析の対象となるナラティブは、語り手と聴き手の相互行為の中で、解釈し解釈されながら新たな意味を生成する性質をもつものである。そのため、そこで生成された意味は常に、語り手と聴き手の臨床場面における双方の人称的な世界を表し、双方の生きてきた歴史や信念、経験などが映し出されるものだと考えられる。このように生成された「語りの意味」が協働的なものと考えれば、その場の個別的で多様な現実に参加する「聴き手である私」もまた分析の対象となるべきではないか。ここでは、語りのプロセスに参加する共同生成者である分析者自身の記述をどのように研究に組み入れていけば良いのか、その具体的な方法と、さらなる可能性について考えていきたい。

【話題提供】

森岡正芳(神戸大学) ナラティブ研究の基本的な視点

Bruner(1986)は人間科学に二つのモードを分けた。具体的事象に対して一般的な法則性、因果関係を把握する論理実証モードに対して、もう一つのモード、ナラティブのモードがあることを提示した。このモードは出来事の体験に意味を与えることが目標であり、具体的な出来事と出来事をストーリーによってつなぎ筋道を立てる。規範だけでなく、逸脱(unusual)を許容し、理解可能にする視点を提供するため、ナラティブは実践研究に有効な枠組みである。対象記述は参加観察者を含む文脈が重視される。その文脈のなかで意味はそのつど構成され多元的なものとなり、ナラティブ研究はおもしろさと危うさが同居している。Bruner はナラティブの迫真性(verisimilitude)を与える根拠は実践の中で確かめられるというが、それはどのように可能なのだろうか。最近のナラティブ研究の展開をふまえながら議論を深めたい。

山本智子(近畿大学) <あなたと私>の語りを聴き直し分析する<私>の視点を導入する試み

「語り」を研究対象にする場合、私たちが意識しておかなければならないことは、その「語り」が「語り手」と「聴き手」の協働的な産物だということである。さらに、<あなたと私>が紡ぎだしたその語りの意味を聴き直し、分析している<私>の存在も忘れてはいけない。<私>とは、<あなたと私>によって生み出された「語り」と、時空間を超えながら対話している分析者の視点であり、生成された「語り」に新たな意味を付与する存在かもしれない。ここでは、知的障害者自立支援施設におけるインタビュー・データをもとに、<私>をどのようにナラティブ研究に組み入れていくのかについて、力動的な視点から話題を提供したいと考えている。

<あなたと私>の物語 ≠ <<あなたと私>+<私>>の物語

松嶋秀明(滋賀県立大学) 実践者／分析者の「見え」を重ねあわせること

報告者はこれまで小・中学校のスクールカウンセラーとして実践活動を行うと同時に、その記録をもとにした研究をおこなってきた(例えば、松嶋, 2008, 2010, 2011)。一般に、実践者による研究では、分析対象となるデータは、実践者自身の行為を通して得られる。実践者は限られた視点をもとにフィールドについての暫定的な理解に至り、その理解が作業仮説となって、新たな実践を駆動するという循環関係が形成される。そこでは、実践者にとっての盲点は、ともすると分析に反映されにくくなってしまふ。実践の改善に資する研究を志向するためには、分析中にどれだけ<異質な他者>の視点を持ち込むことができるかが重要になる。では、それはどのようにして成し遂げられるのだろうか。本報告では、気になる生徒についての対応を話あうカンファレンス場面での、報告者の発話と、最終的分析結果をかさねあわせ、こうした問題について考察していく。